

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K19244

研究課題名(和文) 海外移住高齢者のメンタルヘルスに関する研究

研究課題名(英文) Mental health reserach for Japanese elderly Long-stayers in Chiang Mai, Thailand

研究代表者

依田 健志 (Yoda, Takeshi)

香川大学・医学部・講師

研究者番号：40457528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：2016年2月チェンマイ在住日本人高齢移住者へ質問票調査を実施した。調査項目は基本属性と抑うつに関する抑うつに関する項目はGHQ-28を、QOLはEQ-5Dを用いた。有効回答数は98(回収率90.7%)、回答者の平均年齢は69.5歳であった。GHQスコアは、抑うつ傾向のカットオフ値を6点以上とした場合、21名(23.8%)が該当した。特に、何らかの慢性疾患の有る者は、無い者に比べ有意にGHQ28の平均値が高く、QOLの平均効用値は有意に低かった。以上より、異国の地で慢性疾患罹患者はメンタルヘルスやQOL低下に直結していることがわかり、改善の為の更なる効果的な介入が必要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：We investigated Mental Health status and QOL for elderly Japanese immigrant after retirement their job using questionnaire in Chiang Mai, Thailand. Evaluation items are as follows; Socio-economic status, GHQ-28 for their mental health status, and EQ-5D for their QOL status. 98 samples (collect rate; 90.7%) were collected. Mean Age was 69.5, and 21 (23.8%) people having a chronic diseases. People who had chronic diseases were worse depression and QOL than people who did not have chronic diseases. It suggests that different atmosphere may amplify their anxiety and uncomfortable for having chronic diseases patients. We have to intervene in Japanese elderly immigrant groups to improve their mental health and QOL especially for having chronic diseases patients.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：国際退職移住 QOL メンタルヘルス 抑うつ タイ チェンマイ

1. 研究開始当初の背景

高齢者及び退職者の国境を超える移動は国際退職移住 (International Retirement Migration) と呼ばれ、1970 年代頃より欧米を中心に出てきた概念である¹⁾。日本では 1986 年に旧通商産業省が「シルバーコロンビア計画」を提唱したことが契機となり、徐々に浸透していった。1992 年にロングステイ財団が設立された当初、海外移住の対象は主にアメリカ (ハワイ) やオーストラリア等の滞在先が主であったが、ここ数年は希望滞在国の 1 位はマレーシア、2 位がタイと東南アジアの人気の高まっている²⁾。現に近年のチェンマイを含むタイ北部に移住する 50 歳以上の邦人数は増加しており、在留邦人数全体の過去 5 年間の伸び率も 60 歳以上は 214.4% と急増している (図 1)。

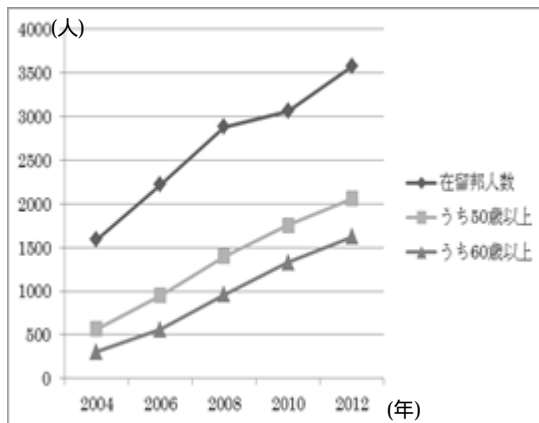


図 1. タイ北部 (チェンマイ周辺) における在留邦人数の年次推移

退職後海外ロングステイへの期待や憧れが喧伝される一方、海外生活は文化、言語、生活習慣等の異なる環境での生活となるため、心身共に大きなストレスを抱くことも容易に想像できる。応募者はこれまで海外長期滞在者のメンタルヘルスに関する調査を施行してきたが、抑うつ状態や不眠といったメンタルヘルスに問題を抱える人の割合は国内一般人口の割合より高く、また不安や問題を抱えても相談する相手がいないという項目がうつ状態と判断された人たちにより多く認められた^{3),4),5)}。しかし、研究代表者のこれまでの調査では主に海外勤務者が中心であり、インターネットを用いた調査であったため高齢ロングステイヤーの回答数は非常に少なかった。また、これまでの先行研究においても、ロングステイ全体に関する調査は少数ある^{6), 7)}が、メンタルヘルスや心身の評価を行ったものは無い。

<参考文献>

1) King R, Warnes T, Williams AM. *Sunset Lives: British retirement migration to the Mediterranean*. Bloomsbury Academic, 2000.

2) 一般財団法人ロングステイ財団. *ロングステイ調査統計 2013*. ロングステイ財団, 2013.

3) Yoda T, Yokoyama K, Yoriki M, et al. *Mental health research for overseas Japanese workers. the 21st Asian conference on occupational health*, Fukuoka, September 2-4, 2014.

4) Yoda T, Yokoyama K, Yoriki M, et al. *Mental health research for Japanese who are living in Bangkok, Thailand. the 5th Joint symposium between Chiang Mai University and Kagawa University*, September 10-12, 2014.

5) 依田健志、横山勝教、吉岡哲、他. *海外在留邦人の現地採用労働者におけるメンタルヘルス調査*. 産業衛生学雑誌. 56(S1):427, 2014.

6) 河原雅子. *タイ・チェンマイにおける日本人ロングステイヤーの適応戦略と現地社会の対応*. 年報 タイ研究. 10: 35-55, 2010.

7) 小野真由美. *日本人高齢者のケアを求めた国際移動: マレーシアにおける国際退職移住とメディカルツーリズムの動向から*. アジア太平洋研究. 18: 253-267, 2012.

2. 研究の目的

本研究は現在チェンマイに在住する高齢ロングステイヤーを対象に、自記式アンケートによるメンタルヘルス調査を実施し心身の状態を明らかにすることを目的とした。メンタルヘルス調査に、チェンマイ地域を選択した理由は、高齢ロングステイヤーが多く在住することに加え、応募者がこれまで行ってきた研究等でチェンマイ大学の研究者とのつながりがあること、また応募者の所属する大学とチェンマイ大学が学術交流協定を結んでおり、調査に際し支援及び協力体制が整っていることが挙げられる。本研究により、これまで明らかになっていなかった高齢ロングステイヤーの心身の状態が解明され、今後ますます増えるであろう高齢ロングステイヤーへの注意喚起や有益な示唆を行う事が可能となり、大変有意義であると考えられた。

3. 研究の方法

研究期間は平成 27 年度から 29 年度までの 3 年間であった。現地研究協力者や現地日本人会等の積極的な協力のお蔭で、当初の計画よりも少し早いペースで研究を進めることができ、より深い考察と今後の新たな研究課題に時間を割くことができたことは大変喜ばしいことであった。以下に研究方法及び計画の詳細を列記する。

(1) アンケート用紙の作成

アンケート用紙は既存のうつ病評価尺度、研究代表者がこれまでの海外長期在留者へ使用したアンケートフォーム等を参照しながら、メンタルヘルスに関して適切かつ客観的に評価できるものを作成した。これまでの使用経験から、抑うつの評価には、General Health Questionnaire(GHQ) 28 項目日本語版 (GHQ-28) を用いた。また、現地在住日本人高齢者の生活の質 (QOL) を評価するため、EQ-5D 日本語版 (3L) を使用した。本調査において特徴的な項目 (例えばタイ語の会話能力、現地滞在期間、現地日本人会等への参加有無など) を数項目選定し、年齢、性別、収入、学歴、職業、婚姻歴、既往歴、飲酒・喫煙歴等、社会経済的因子を複合し、アンケートフォームを作成した。

(2) 調査協力者との事前打ち合わせ、調査の説明

調査に先立ち、平成 27 年 8 月にチェンマイを訪れ、チェンマイ大学医学部脳卒中内科、附属病院高齢者ケアセンター長の Dr. Surat Tanprawate 氏、同大学看護学部 Benjamas Suksatit 氏らと調査内容の詳細について議論し、より有効に調査を進めるにはどうすればよいか、また適切な調査補助員についての助言と研究協力についての同意をもらった。調査対象はチェンマイ及びチェンマイ周辺に居住する日本人高齢者になるが、彼らの多くはチェンマイロングステイライフの会 (会員数 156 名) やチェンマイ日本人会 (会員数 357 名) などの日本人の集まる会に所属している。前述の両会へ、8 月のチェンマイ訪問時に本調査について説明を行い、調査について両団体の同意と協力を得、円滑に調査が進むよう調査対象者へ呼びかけてもらうことにした。具体的には両団体の月例会が開催される時に合わせ、調査ができるよう日程調整を行い、半年後の平成 28 年 2 月に調査を施行するのが最も効果的と判断した。また、他の日本人団体 (チェンライ日本人会; 115 名) へも調査協力依頼を行ったが、総会のような形で会員が全員集まるのが無いとのことで、調査は難しいとの回答を得た。なお、ここでのロングステイヤーは早期退職者を含めた 50 歳以上、チェンマイ周辺に 3 か月以上居住する日本国籍を持つ者と定義した (チェンマイ周辺推定 50 歳以上邦人数 2000 人)。

(3) 調査の施行

本調査に先だって、事前調査として数名へアンケート調査を行い、質問項目の再検討を行った後、アンケート調査を行った。調査期間は平成 28 年 2 月で、各団体月例会に参加したロングステイヤーを調査対象とした。調査の際は、予め調査の背景や目的を全体へ説明し、その後同意できた方のみ調査票を記入してもらい、無記名の調査票を個別の回収

袋に入れてもらい、密閉した上で回収した。

(4) 調査結果集計・解析

回収した調査票は、平成 28 年度前半に集計及び解析を行った。データは各項目毎に単純集計、クロス集計を行うとともに、抑うつ傾向や不安傾向の有無に関連のある因子について (ロングステイに関連する項目 (言語能力、滞在期間) やその他の社会経済的因子など) と抑うつや不安等の関係を ANOVA 等により解析した。また、既存データ・国内データとの比較検討も行った。

4. 研究成果

有効回答数は 98 であった (回収率 90.7%)、回答者の平均年齢は 69.5 ± 5.9 歳であった。88%の回答者は、年平均 1 回以上日本に帰国していると回答した (一人当たり平均帰国回数 2.1 回/年)、現病歴ありと回答した人は 67 名であった。抑うつ評価に関する GHQ のスコアは、先行研究より抑うつ傾向のカットオフ値を 6 点以上とした場合、21 名 (23.8%) が該当することがわかった。特に、何らかの慢性疾患を有する者は、そうでないものに比べ有意に GHQ28 の平均値が高いことが判明した。(図 2)

Mean GHQ28 score by chronic diseases

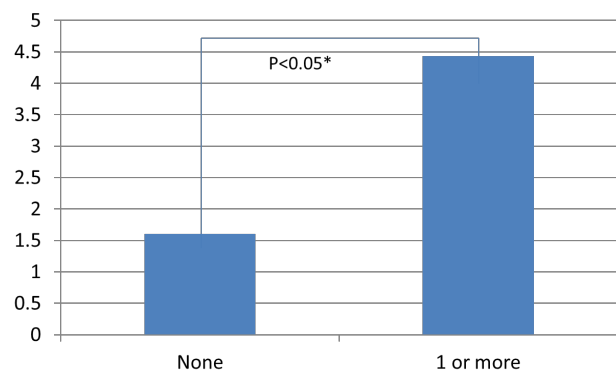


図 2. 慢性疾患の有無と GHQ 28 スコア平均値との関係

QOL については、全体の QOL 効用値の平均値は 0.918 ± 0.140 であった。各年齢群ごとの平均効用値は、70 歳未満が 0.957 ± 0.105 、70-74 歳が 0.868 ± 0.161 、75-80 歳は 0.910 ± 0.139 、80 歳以上は 0.850 ± 0.066 であった。慢性疾患を有する人の平均効用値は、無しと回答した人より有意に低く (0.890 ± 0.154 vs 0.980 ± 0.075 , $p < 0.05$)。慢性疾患と QOL 低下の関係性が示唆された。

以上のことより、慢性疾患を有することは、抑うつや QOL 低下と関連性があることが示唆され、自由記述回答を参照すると、慢性疾患に適切に対応できる現地の医療機関や医療

体制に対する情報不足や不安が今回の結果となった要因の一つであることが考えられた。

一方、チェンマイ在住日本人高齢者と日本に在住する一般高齢者のQOL平均値を比較すると、チェンマイ在住日本人高齢者の方がどの年代も高い数値を表した。すなわち、チェンマイ在住の高齢者の方が高いQOLを維持できていると言える。

これらの結果から、いわゆる基礎疾患を持たない状況でいる間は、海外での生活を謳歌できているが、ひとたび疾患を有する状態になったらそのような状況から一転すると考えられ、今後はいかに健康状態を保持させていくか、ということが海外在住高齢者のメンタルヘルス向上に重要な意味をもつことが示唆された。結果は今後更に精査し、他の要因も含めて総合的に考慮していく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

1. Takeshi Yoda, Benjamas Suksatit, Rujee Rattanasathien, Bumnet Saengrut, Katsunori Yokoyama, Yugo Okabe, Hiromi Suzuki, Kanae Kanda, Tomohiro Hirao. Evaluation of the mental health and QoL for elderly Japanese long-stayers in Chiang Mai, Thailand
10th European Congress on Tropical Medicine and International Health, 16-20 October 2017, Belgium.

2. 依田健志、Suksatit Benjamas, Rattanasathien Rujee, Saengrut Bumnet, 横山勝教、岡部悠吾、神田かなえ、鈴木裕美、平尾智広。チェンマイ在住日本人高齢者の生活の質 (Quality of Life) に関する調査。第 31 回日本国際保健医療学会学術大会、2016 年 12 月 3-4 日、久留米市

3. Takeshi Yoda, Benjamas Suksatit, Rujee Rattanasathien, Bumnet Saengrut, Katsunori Yokoyama, Yugo Okabe, Hiromi Suzuki, Kanae Kanda, Tomohiro Hirao. The Mental Health Status of Elderly Japanese Long-stayers in Chiang Mai, Thailand.
Aging & Society Sixth Interdisciplinary Conference, 6-7 October 2016, Norrköping, Sweden.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

依田 健志 (YODA, Takeshi)

香川大学・医学部公衆衛生学・講師

研究者番号: 40457528

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

平尾 智広 (HIRAO, Tomohiro)

香川大学・医学部公衆衛生学・教授

徳田 雅明 (TOKUDA, Masaaki)

香川大学・医学部細胞情報生理学・教授

Benjamas Suksatit

Department of Medical Nursing, Faculty of Nursing, Chiang Mai University

Rujee Rattanasathien

Nursing Service Division, Maharaj Nakorn Chiang Mai Hospital, Faculty of Medicine, Chiang Mai University

Bumnet Saengrut

Nursing Service Division, Maharaj Nakorn Chiang Mai Hospital, Faculty of Medicine, Chiang Mai University